

安田女子大学大学院紀要 第27集
日本語学日本文学専攻

白居易「山中五絶句」剖析

内 田 誠 一

要 旨

開成五年（八四〇）、白居易が中岳嵩山の氣象や動植物を詠じた連作に、「山中五絶句」がある。このうちの二・三首は、寓意があると解釈される傾向にあるようだが、それ以外の詩では積極的に寓意が捉えられていないものもある。

筆者が剖析したところ、五首全てに寓意が隠されており、自身を嵩山の自然や動植物に投影していると判断した。また、この五首には一連の流れがあり、極めて意図的に構成されていると考えるのが穏当であろう。

キーワード

白楽天、白氏文集、嵩山、唐詩、中唐

一、序

開成五年（八四〇）、白居易が河南登封にある中岳嵩山を訪れて、その地の氣象や動植物を詠じた連作に、「山中五絶句」（作品番号三四七五（三四七九））がある。「遊嵩陽見五物、各有所感、感興不同、隨興而吟、因成五絶」という題下注がつく。五つの絶句の詩題は、「嶺上雲」「石上苔」「林下樗」「澗中魚」「洞中蝙蝠」。このうちの二・三首は、寓意があり、また嵩山の景物と白居易自身とを関連づけて解釈されることもあるが、それ以外の詩ではどうなのであるうか。

さきに結論を述べると、筆者内田は、これら五首全てに寓意が隠されているとみる。題下注に「感興不同」とあり、「感興」は「因物感興」「托物寓感」を意味するからである。さらに、「嶺上雲」から「洞中蝙蝠」に至るまで、開成五年当時の白居易の政治思想や人生観が凝縮されており、五首に一連の流れが存在するように構成されている、と捉えるべきであろうと考えている。

ではこれから、一首ずつ構成や寓意を明らかにしていき、最後に五首の流れや構成についても考察してみたい。

二、五首の剖析

これから「嶺上雲」「石上苔」「林下樗」「澗中魚」「洞中蝙蝠」の五首の内容を吟味していくことにする。

嶺上雲

嶺上の雲

嶺上白雲朝未散

嶺上の白雲 朝に未だ散ぜず

田中青麥旱將枯

田中の青麥 旱に將に枯れんとす

自生自滅成何事

自から生じ自から滅して 何事をか成す

能逐東風作雨無

能く東風を逐ひて 雨と作るや無や

佐久節『白樂天全詩集 第四卷』（日本図書センター、一九七八

年、以下『全詩集』、『新釈漢文大系 白居易』（山中五絶句）が収められている巻六十八は根ヶ山徹氏担当、明治書院、二〇一〇年、以下『大系』）、ともに、寓意がこの詩に含まれているようにには解釈されていない。ところが、朱金城校『白居易集箋校』（上海古籍出版社）では、何焯の「終為不曾作宰相、多許感喟」を引いている。宰相とならなかったことへの嘆き、ということであろうか。

本詩は前対格であり、「嶺上白雲」と「田中青麥」が緊密に対応している。第四句では、「白雲」が東風を追って流れていき雨を降らせることができるだろうか、と詠ずる。このことから「白雲」

は、ひでりで枯れそうな青麥に慈雨を降らせる可能性のあるもの、ということになろう。

では、「嶺上白雲」と「田中青麥」はそれぞれ何を喩えているのか。「田中青麥」は生活に困窮する農民、「嶺上白雲」は経世済民の当事者である為政者と考えられよう。第三句に「自生自滅」とあり白雲は自然に消滅するものであり、人為の関与はないことが詠じられる。そして、白雲が東風を追って雨となるかどうか、と問うて終わる。経世済民の志を立てて官僚となったのであるが、果たして自分は為政者として民衆を済うことができたといえるのか。いくら努力しても人為の及ばぬところも多く、時の流れやめぐりあわせ次第なのではないか、という疑問を吐露しているのではなからうか。五絶句は、この第一首の疑問（これまでの官僚生活の反省か？）から始まっているらしいことに注意しておきたい。

石上苔

石上の苔

漠漠斑斑石上苔

漠漠斑斑たる石上の苔

幽芳淨緑絶纖埃

幽芳淨緑纖埃絶えたり

路傍凡草榮遭遇

路傍の凡草榮遇を榮えしむるも

曾得七香車輾來

曾て七香車に輾らるるを得來たる

前半では、人跡まれなる深山幽谷の岩の上に生える苔とその様子を詠じる。苔の香しい花（実は花ではなく雄株にできる雄器）と清らかな緑の茎や葉には微かな塵すら見られない。後半では、路傍の

野草が道行く人に愛でられ、時には貴顕の眼に触れるような光榮に浴するのであるが、これまで権力者の車に轢かれて無残なことになってしまったことを言う。⁽¹⁾

本詩では「石上苔」と「路傍凡草」が対照的に詠ぜられる。「幽芳」は高潔な徳行を喻えることがあり、「浄緑」の「浄」は「静」に通じ、塵世と隔絶した僻静なる環境を暗示する。よって岩の上の苔は、深山幽谷に逃れて超然と生きる隠者、対して「路傍凡草」は、世俗の世界（ここでは官界）に生きる人々を、それぞれ喻えていると考えられよう。

前者は洛陽に退いた現在の自分を、後者はそれ以前の自身を重ねているのではないか。第四句で七香車で輾られた俗世の草は、左遷された自分や、後述する殺害された宰相李訓らを喻えるか。

林下樗

林下の樗^{ちよ}

香檀文桂苦雕鐫

香檀文桂 雕鐫^{ちようせん}に苦しむ

生理何曾得自全

生理何ぞ曾^{かつ}て自から全きを得ん

知有無材老樗否

無材の老樗有るを知るや否や

一枝不損盡天年

一枝も損ぜずして天然を尽くす

第一句の「香檀文桂」と第三句の「無材老樗」が対照されている。「香檀」の中にバラの香りがするもの（現在ではローズウッドと呼ばれる）があり、高級家具に使用される。「文桂」はモクセイ（木犀）で、香り高い花木として植えられるが、彫刻の材料としても使われる。この二種の樹木は、それぞれ富裕な家の家具や彫刻に用いられ

るので、人々によって切られノミを入れられて苦しむことになる、というわけである。

一方、第三句の「樗」はニワウルシで、薪以外に役に立たぬことから古来無能な人間に喻えられる。ここでは「無材」の修飾語まで付く。よってこれと対照される「香檀文桂」は、才能溢れる人材を暗に意味している。「無材老樗」は、一本の枝すら人によって切られることなく、天寿を全うできるというわけである。

「香檀文桂」が切られて富裕な家の調度品として彫刻を施されるように、能力のある人間は登用されて栄達するものの、多くの仕事を課せられて心身をすり減らし、時には左遷され、はては権力闘争によって殺害されることもある。ここでは官界でよく見られる現象を一般論として提示するのみならず、白居易自身の体験をも詠じていると思われる。科擧の準備に精進した結果、登第できたものの若くして身体は老化し、官位が上がったものの激務に追われ、はては左遷も経験した。そこで、老後の自分は嵩山のニワウルシのように生きて天寿を全うしたい。そう考えているのではないか。「老樗」と敢えて「老」の字を冠していることから、そう解釈するのが穏当であろう。

『全詩集』や花房英樹「白居易年譜稿 下」では、嵩山の景物と白居易自身とを関係づけて「林下樗」を解釈している。⁽²⁾また、『大系』の通釈も同様で、「林下樗」の通釈の最後で「年老いた私もこの老樗のように無為無能の人間として一本の枝も損なわれずに天命を全うしたいものだ」としている。

澗中魚

澗中の魚

海水桑田欲變時

海水桑田変ぜんと欲するの時

風濤翻覆沸天地

風濤翻覆 天地に沸く

鯨呑蛟鬪波成血

鯨呑み蛟鬪ひて波血と成る

深澗遊魚樂不知

深澗の遊魚樂しみて知らず

本詩は甘露の変を詠じたものとされる。甘露の変は、大和九年（八三五）十一月二十一日に起こった宦官誅殺未遂事件。宦官の専横を忌み嫌う文宗の御意を体した宰相李訓は、鳳翔節度使の鄭注らと共に宦官一掃を目論んだ。功を焦る李訓はザクロの木に甘露が下ったと称し、宦官たちを誘き出して誅殺しようと計画。だが失敗に終わり、李訓らは殺害された。

第三句の「鯨」「蛟」と第四句の「深澗遊魚」が対照的に表現されている。すなわち甘露に変が起きる権力闘争の機運を前半で詠じ、後半では闘争とその凄惨な結末を「鯨呑み蛟鬪ひて波血と成る」と詠じている。一方、中央政界から離れている人や、隠棲している人は「深澗の遊魚」のように安穩自由な生活を楽しんでいるとする。

本詩について、甘露の変を詠じたとする解釈はなされても、白居易の処世と関連付けるものは少ない。⁽³⁾白居易が甘露の変を詠じた「九年十一月二十一日感事而作」では、「麒麟は脯と作り龍は塩と為る、何ぞ泥中に尾を曳くの亀に似かん」と詠ずる。白は苛烈な牛李の党争からも距離を置き、官僚と宦官との対立からも身を避けていた。事実、甘露の変勃発当時、白居易は太子少傅として洛陽にい

た。本詩はそれから五年後の作。時が経って自らの処世が正しかったと客観的に考えるようになってきたことを暗に表現しているのではないか。

洞中蝙蝠

洞中の蝙蝠^{へんぷ}

千年鼠化白蝙蝠

千年 鼠は白蝙蝠と化し

黒洞深藏避網羅

黒洞 深く^{かく}藏れて 網羅を避く

遠害全身誠得計

害を遠ざけ身を全うするは 誠に得計なるも

一生幽暗又如何

一生幽暗なるは 又た^{また}如何^{いかん}

本詩で注目すべきは第一句に「白蝙蝠」とあることである。白居易は自分の姓である「白」の字を名に共有する「白蝙蝠」に、自己を投影していると考えたのではないか。「白蝙蝠」が「黒洞」⁽⁴⁾に隠れ住んでおり「遠害全身」なのだが、「一生幽暗」な場所に居るのはどうであろうか、と疑念を感じている（なお、「全身」は「林下樗」の中の「自全」とほぼ同義。これは当時の白居易の率直な気持ちであって、「あの時・・・していれば」という後悔が滲み出ていると読み取るのが自然である。

「黒洞」と対比される「白蝙蝠」。この洞窟のコウモリは「白い」のに、暗い洞窟に身を潜めている。この描写には、自分は栄光なる環境に相応しいのに、「白蝙蝠」のように日の当たらない（名誉名声とは無縁の）洛陽に今いるのだ、というディレンマが込められている。洞窟の奥深くに住む蝙蝠に自分の境遇を見たのだろう。

ただ、「嶺上雲」「石上苔」「林下樗」「澗中魚」では「白雲」「苔」

「樗」「魚」とそれぞれ対照されるものが詠ぜられていたが、この詩では「白蝙蝠」に対照される生物が現れない。「白蝙蝠」は「白」を名の一部に持つがゆえに白^{あか}い環境にあるべき生物なのだが、どうい^くうわけか害を遠ざけるために黒い洞窟に住んでいる。即ち白居易は、本来は榮光に満ちた長安において活躍すべき自分と、危険を遠ざけて洛陽に閑居している今の自分をいずれもこの白蝙蝠に投影していると考えてよいのではないか。

王汝弼『白居易選集』（上海古籍出版社、一九八〇年）では「この作品は、作者が晩年になって、その胸の内には功業を立てようとする政治的情熱と明哲保身の消極的思想とがなお矛盾して存在することをはっきり示している」（拙訳）と説明する。

なお、本詩より後（会昌年間）に、白居易は「食中十二章」の其六でコウモリを詠じている。

一鼠得仙生羽翼 一鼠^そ仙を得て 羽翼を生じ
衆鼠相看有羨色 衆鼠^あ相ひ見て 羨やむ色有り
豈知飛上未半空 豈に知らんや 飛び上りて未だ半空なら

已作鳥鵲口中食^{さるに} 已^{すで}に鳥鵲^{うえん}の口中の食と作るを

一匹のネズミは（千年の時を経て）羽や翼が生え、「仙鼠」即ちコウモリとなった。そして天に飛び上ったものの、まだ半空にも達していないのに、カラスやトビに食われてしまったのだった。

このコウモリは、科挙とその後の試験を受けて高級官僚となり、

まだ榮進途上の者を喻えているのではないか。しかし、衆鼠の羨望の的となったコウモリのように、人々から称賛と羨望の対象とされる高級官僚は、左遷されたり甚だしくはまだ天命を全うできなかったりすることを比喩しているよう。

アーサー・ウェイリー『白楽天』（花房英樹訳、みすず書房、一九五九年）では、五首の中から「洞中蝙蝠」を引くが、引用のまえに次のように論じている。

彼の生涯の、最後の数年に書かれた数首の詩から、官吏としての人生が終るまで、うまく自分を洛陽に「隠していた」が、結局、用心深すぎたのではないか、と思ったことは明らかである。たしかに彼は、どちらの政党にも味方することを頑強に拒否し、多くの友人に、ふりかかった災いを蒙る危険を避けて来た^{（五）}。

また、下定雅弘『白氏文集を読む』（勉誠出版、一九九六年）の第三章「宰相になれなかった白居易」では、ウェイリーがこの詩を「説明を加えて引いている詩」であるとした上で、次のように言う。

なるほど、これによれば、白居易が洛陽に閑居を決めこんだのはまさしく保身のためで、このために宰相職をも棒にふったのである。そして、それは「一生幽暗」という厭うべき状態との引きかえによって可能だったのだ。洛陽が「黒洞」「幽暗」なら、長安は陽光にまばゆく輝く街である。この詩は、長安での活躍・宰相職への願望が白居易の心底において、どれほど強い

ものであったかを示している。

一方、白居易自身がコウモリの描写によって、自己の政治的立場や思想を暗示的に表現している、あるいは自身の立場や思想をコウモリのそれに仮託している、とまでは解釈しない学者もいる。謝思焯『白居易』（中華書局、二〇〇五年）では、「この詩は蝙蝠に喩えて、士大夫が險悪な政局の下で身を全うし害を遠ざけることはすなわち己むを得ざる振舞いであることを説く」とし、白居易自身との関連にまでは踏み込んでいない。敢えて踏み込まない理由があるのだろうか。

さて、これまで見てきたように、「嶺上」はともかくとして、嵩山山中の「石上」「林下」「澗中」「洞中」はいずれも安全な場所として詠ぜられている。詩題が全て「場所＋方向を表す文字」という形をとっていることも注意すべきであろうと思われる。五首はかなり意図的に創作されていると考えるのが穏当であろう。また、白居易にとって嵩山は、洛陽とはまた違った意味で、心身の平安を担保してくれそうな場所でもあったのであろう。だが、嵩山の景物を眺めるその胸のうちは、必ずしも平常心ではなかったようだ。

三、五首のテーマと流れについて

冒頭で述べたように、筆者は、これら五首全てに寓意が隠されており、嵩山の景物・動植物に白居易自身が投影されているとみる。

それはこれまで縷縷検証してきた通りである。さらに、「嶺上雲」から「洞中蝙蝠」に至るまで、開成五年当時の白居易の政治思想や人生観が凝縮されており、五首に一連の流れが存在するように構成されていると考える。これについて、以下実証していきたい。

まずそれぞれの詩において、対照的に詠じられているものをそれぞれ確認しておく。

「嶺上雲」 嶺上白雲―田中青麦

「石上苔」 石上苔―路傍凡草

「林下樗」 香檀文桂―無材老樗

「澗中魚」 鯨・蛟―深澗遊魚

「洞中蝙蝠」 黒洞の蝙蝠―（白^{あか}い環境にあるべき）蝙蝠

五首の寓意をそれぞれ簡単に表すと次のようになるのか。

第一首 官界に入って経世済民を目ざしたもの、やはり自分一人の力ではどうにもならぬことが多かったのではないか。

第二首 深山に住む隠者は汚れることはないが、俗世で栄達する者は迫害され、落命することさえある。

第三首 能力のある者は身を削られ、天寿を全うできないものさえある。

第四首 権力闘争から離れている者は、結局、安穩自由でいられるのだ。

第五首 保身は一面有益なことではあるが、陽の光の当たらぬ所

で過ごすことは、果たして良いことなのであろうか。

第一首は、経世済民の志をもって風諭詩を作り、善政につとめてきたが、どれだけ民衆の利益となったであろうか、と疑念を抱いている。第二首から第四首までは、詩題となっているものが、白居易が好ましいとするもので、自分のあるべき姿や立場を寓意している。ところが、第五首に至って、白蝙蝠についての評価が「一生幽暗又如何？」と疑問形になっている。

これはどういうことなのであろうか。第一首で、これまでの官僚生活において、若いころに懐いていた経世済民の志を遂げた、とは言えないのではないかとという疑問を投げかける。それに加えて、第二、三、四首では官界の中心にいるようなことは、自分の身を危うくし、場合によっては最悪の結末に繋がるという虞れを懐き、保身こそが大切であるとする。自分の処世を肯定しているわけである。ところが、第五首に至って、それが果たして良い事なのであろうか、と自己の処世に対して疑念を深めているわけである。

白居易らしい「兼濟」と「独善」との間の大きな振幅がここでも現れている。この年になってもまだ宰相にならなかったことを悔やんでいるということになる。疑問に始まり、疑問で終わる、という極めてめずらしい構成ではないか。

こう考えてくると、この五首は意図的に構成されていると考えるのが極めて妥当であることとなる。独善を守り、自由と平安の毎日を過ごしていることに満足しつつも、やはり宰相への未練、長安の官界への未練を捨てきれずにいる白居易の姿がここにあらわれている。

よう。中岳嵩山に来て、自然の景物を目にしながらも、心の中は激しく揺れ動き、明鏡止水の境地には程遠かったのだということが言えるであろう。

四、結 語

白居易は「兼濟」と「独善」の二面性があり、その人生においてもどちらが優勢となるかについて変化が見られる。晩年の白居易は「独善」の生活を送ったのであるが、すでに下定氏が指摘するように、晩年まで宰相への未練を捨てきれなかったのである。

この「山中五絶句」にもそれがあらわれている。宰相への未練については、敢えてここで論ずるまでもないのであるが、この「山中五絶句」の中の数首にのみ寓意を見出し、五首の連関や流れについて全く意に介さないような解釈に対して、筆者は予てより違和を感じていた。

本稿において五首を「剖析」したことにより、五首全てに寓意があり、連作として一連の流れがあり、意図的な構成がなされていると判断した。白居易は五絶句全てにおいて、自己を嵩山の自然や動植物に投影し、自己の在り方に関する二つの価値観の間を揺れ動く心理を偽ることなく表現した、と言えるのではなからうか。

■注

(1)『大系』では、第四句「轡」を「七香車を」乗り回す」とするが、や

は、『全詩集』のように「轍られてゐる」とする方が、「石上苔」と「路傍凡草」の生存環境の違いが明白となる。

(2) 花房英樹「白居易年譜稿 下」(京都府立大学学術報告 人文、一九六三年)では、「林下樗」について、後半二句を引き「蓋自喻也」とする。「嶺上雲」は前半二句を引き、また、「澗中魚」は後半二句を引いて「鯨吞蛟鬪、謂武宗即位當時之形勢」とする。「石上苔」「洞中蝙蝠」は詩句の引用もない。よつて、花房氏は「林下樗」についてのみ、白居易自身と関連づけて解釈しているのではない。

(3) 謝思煒『白居易選注』(中華書局、二〇〇五年)では、「澗中魚」について、「この詩、先人は甘露の変を指すとし、詩人が陰悪なる政局に対する恐怖と嫌悪を表現していると言う」としている。しかし、白居易自身の立場や処世と関連付けることはしていない。

下定雅弘『白楽天の愉悦―生きる叡智の輝き』(勉誠出版、二〇〇六年)では、「甘露の変」では、「中隱」の生き方を外部からさらに固める大きな役割を果たしました」とある。白居易は、都の官僚という立場にあつて「独善」の生活を送るという「中隱」の生活を善しとしていたのである。実はそれは白居易の一面に過ぎなかったのかもしれない。

(4) 白居易は嵩山に来て洞窟を実際に見て、その暗がりに住む蝙蝠に自分の境遇を見たのであろうか。それとも単に洞窟のコウモリの話聞いただけなのであろうか。

ところで、嵩山南麓の嵩岳寺の裏の峰には、宋代以降に「羅漢洞」と呼ばれることになる洞窟がある。この洞窟は今でも蝙蝠が生息している洞窟ということで、土地の人々の間ではよく知られた存在である。筆者は以前にこの洞窟を調査したが、洞窟の入口付近こそ外の光が入ってきて明かったが、7×8メートル先は真闇で進入することを断念した。

白居易はここまでやって来たのであろうか。それとも土地の人或いは嵩岳寺の住持からこの洞窟の様子を聞いてこの詩をものしたのであろうか。白居易は嵩岳寺も詩に詠じている。拙稿「白居易が詠んだ嵩山の旧蹟」(『中国文史論叢 第6号』(中国文史研究会、二〇一〇年)参照。

(5) ウェイリーは続けて、白居易の翰林院の仲間の学士たち五名が宰相になったものの、そのうちの李絳が暗殺され王涯は宦官に首を切られたこ

とを指摘する。「白が、彼自身のためでなくても、少なくとも一族全体の名誉のため、宰相になる危険を冒すべきではなかったかと、時に考えたことは確かである」と言う。

さらに、「安全は守り通したが、それにはずいぶんの犠牲を払ったのだ、という白の感情を、最もはつきりと反映している詩」が「洞中蝙蝠」であるとする。